

会議派政権の崩壊

会議派は異質な者の寄せ集めであったが故、1915年の春、一連の戦闘でビヤ軍が敗退する前に分裂が始まり、政治的麻痺状態に陥っていた。先ずグティエレス大統領派が分離して崩壊が始まり、次いでビヤとサパタ両派の間の緊張が高まった。会議派は都市住民、特に労働者階級を取り込む能力に欠けていることが次第に明らかになった。地方での改革プログラムは一部では実行されてはいたが、会議派は全国的な改革を迫るだけのイデオロギーに欠けていた。更に追い討ちをかけるようにアメリカとの関係が急速に悪化していった。カランサ派は国内外で巧みに反会議派政府プロパガンダを展開した。会議派からオブレゴン支持者が抜け、グティエレスは既に会議派の代表者とは言えなくなっていた。彼はビヤとサパタを再集結し、会議派運動を盛り返そうとしたが、二人は逆にグティエレスに影響力を強め、彼を自分たちの代弁者にしようとした。二人とも彼の配下であるとは思ってもいなかった。グティエレスと両者の離反を早めたのは「メキシコ市の恐怖」と呼ばれるビヤ＝サパタ両派による独断的な処刑であった。

恐怖の報復はトレオンでビヤに敗れたジェネラル・ムンギアを初めとするウエルタの将校や民間人に向けられた。処刑されたのは推定百五十人前後、処刑された革命軍の中で最も著名であったのはサパタ派を代表して会議に参加したパウリノ・マルティネスであった。サパタがビヤの処刑に反対しなかった背景は判然としていない。ビヤの動機はマルティネスがオロスコと組んでマデロを攻撃したためであろうと考えられている。³⁶

これら一連の処刑を誰が指示したか定かではないが、一部はビヤあるいはサパタ自身により、大部分は彼らの部下によって行われた。消息筋はトマス・ウルピナがその多くを実行したと見ていた。しかしグティエレス大統領がビヤ、サパタに殺戮を激しく非難したときに、この両者はきっぱりと処刑の正当性を主張した。「メキシコ市の恐怖」は処刑だけではなかった。彼はトレオンで行ったように、首都でも富者からの強制徴収をするために営利誘拐を頻繁に行った。これ等の残虐行為により首都の上流社会と外交官の間でビヤのイメージは著しく低下した。

グティエレス政権にとって「メキシコ市の恐怖」は氷山の一角に過ぎなかった。会議派政府とアグアスカリエンテス会議の第三勢力はビヤとサパタから決別した。グティエレスは彼を支持してくれた第三勢力の結束を目指した。オブレゴンを頭とするかなりの人数は既にカランサの元に復帰していた。しかし元のカランサ派であったルシオ・ブランコ、北部師団のジェネラル・ロブレスやジェネラル・エウヘニオ・アギレ・ベナビデスはまだ会議派を支持していた。グティエレスはカランサ派の他の指揮官へ、ビヤとカランサを向うに回して戦うことを促す信書の発信を始めた。誰もカランサとの関係を断とうとした者はいなかったが、彼らはグティエレスを激励した。

1914年12月末、ビヤはグアダハラハラでグティエレスの辞任、あるいは離反の噂を耳にすると、メキシコ市に入る列車の運行をストップさせた。前触れ無しでグティエレス

の前に現れたビヤは辞任をするなら撃ち殺すと脅したが大統領は折れなかった。グティエレスは、主都で暗殺や恐喝が行われている状況下では統治できないこと、ビヤとサパタは自分が持つ全国統治の権限を妨害していると非難した。事実両派は鉄道や電信網を支配し、独自の紙幣を発行していた。³⁷

ビヤは大統領を処刑するぐらいの権力は持ち合わせていた。しかし彼はグティエレスの裏切りの確たる証拠を見出せなかったし、大統領の処刑は彼の合法性を弱め、アメリカとの関係を悪化させる恐れがあったため躊躇した。二人は奇妙な妥協をし、ビヤはグティエレスがメキシコ市から逃亡できないように軍を配置したことを彼に告げた後、ビヤ軍を名目だけ大統領の支配下に置いた。この衝突があつてグティエレスはビヤから離れる決心を一層固め、オブレゴンやカランサのジェネラルに手紙を書き、ビヤとカランサを相手に戦うことを訴えた。グティエレスが交信した相手の一人がカランサ派アントニオ・ビヤリアルであった。ビヤリアルの部隊がアンヘレスに敗れたとき、その交信文書がビヤの手に入った。ビヤはグティエレス内閣で国防相であつた北部師団のホセ・イサベル・ロブレスに打電しグティエレスの処刑を命じた。ロブレスはそれを拒み、グティエレスに電報を見せた。グティエレスは自分に忠実な者を連れて主都から逃れる決心をした。

グティエレスは彼を支持する部隊をメキシコ市に集め、メキシコ市に残っているビヤ軍から自らを守ろうとした。彼は北部師団でビヤに批判的であつたエウヘニオ・アギレ・ベナビデスをサン・ルイス・ポトシの知事兼軍事指揮官に任命し、そこで彼の政府を樹立しようとした。彼はナイーブにも第三勢力を結集してビヤ、サパタ、カランサを退けてメキシコの大統領であり続けようとした。12月14日、ベナビデスは軍を集め、国庫からありったけの資金を持ち出してメキシコ市を脱出した。不意を衝かれたサパタ＝ビヤ軍は無勢のため止めることが出来なかった。翌日グティエレスはホセ・バスコンセロによって書かれたマニフェストを発表した。³⁸

グティエレスの第三勢力を結成しようとする望みは幻想でしかなかった。カランサはメキシコ内外に会議派内部の分裂を宣伝しようと、嬉々としてグティエレスのマニフェストを発表した。カランサ派のジェネラルは誰も最高指揮官に見切りをつけるような事はしなかった。彼らにはグティエレスが余りにも非力に見えた。ウルピナが率いるビヤの分遣隊がサン・ルイス・ポトシに近づいたとき、ベナビデスの兵は殆どが抵抗せず逃げた。ベナビデスはアメリカに逃れようとしてカランサ軍に捕らわれ、ジェネラル・エミリアノ・ナファレテによって処刑された。部下に逃げられたルシオ・ブランコはアメリカに亡命した。ブランコは1922年、オブレゴン政権転覆を企て殺された。グティエレスはヌエボ・レオン州の小さな町に逃げ込んで政府を樹立しようとした。殆どの部下に逃げられ、僅か数名となつて如何とも出来ず、大統領辞任を宣言し、カランサと和解した。一時ビヤの寵愛を受けたホセ・イサベル・ロブレスはビヤと和解し、1915年、ビヤの敗戦まで共に戦った後

カランサ軍に投じた。彼はカランサ軍に抵抗を続けた南部の保守主義者討伐を命ぜられ、オアハカへ派遣された。1917年、ロブレスは再びオアハカ軍に加わってカランサに反抗して捕らわれ、処刑された。³⁹

グティエレスの逃亡により会議派政府が無くなったのではなく、彼が逃亡したその夜、アグアスカリエンテス会議でビヤの代理人を務めたロケ・ゴンザレス・ガルサが、サパタとビヤの承認を得て大統領の地位についた。元マデロ派の知識人が閣僚に加わったが、全体としては弱体であった。一方ベラクルースのカランサ政府は、彼らこそが真の国家的政策を迫行できることを示し、会議派の中央政権の影はすっかり薄くなった。カランサ政府は農業のみならず社会改革案も発表した。「メキシコ市の恐怖」とグティエレスへの態度により、国内外でビヤのイメージは地に落ちた。フアレス市攻略以来ビヤは山賊で無法者のイメージ払拭に努めてきた、しかしメキシコ市での一連の出来事で、元の木阿弥となった。

40

カランサとオブレゴン巧みなプロパガンダを展開した。ビヤの本名はドロテオ・アランゴで、栄光に満ちたフランシスコ・ビヤの影に潜む本当の姿は人殺しの山賊であり、彼を動かしているのは反動主義者フェリペ・アンヘレスとホセ・マリア・マイトレナであると繰り返し宣伝した。彼らはフェリペ・アンヘレスにも矛先を向けた。アンヘレスは革命の前は連邦軍の高官で、革命中そのように振舞ってきたこと、さらに革命を内部から潰すためにウエルタを送り込んだ、などと仄めかした。⁴¹

36. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P457

37. Ibid. P461

38. Ibid. P462

39. Ibid. P463

40. Ibid. P464

41. Ibid. P466